

# 常滑窯産有耳壺二例

野末浩之

## 1

ここに取り上げる資料は、一つは昭和55年度から当館に寄託されている蒲郡市在住の個人の所蔵品で出土地不明品（資料1）、いま一つは平成2年度に愛知県陶磁資料館の収蔵品に加えられた資料で、静岡県浜名郡雄踏町在住の個人から寄贈され、同町出土とされているものである（資料2）。常滑窯の有耳壺といえば、広口壺に耳の付くものかあるいは三筋壺に耳の付いたものはこれまでも比較的知られていたが、小型の有耳壺は稀であった。常滑窯製品としては類例が少なく興味深い特長を備えていることから、この2点の資料を紹介することにする。なお、産地名称は知多半島に広く展開する窯という意味で学術的には知多窯という名称が妥当とされているが、より一般的でありすでに共通認識も確立されていると思われる常滑窯という名称を用いることにする。

## 2

（資料1）

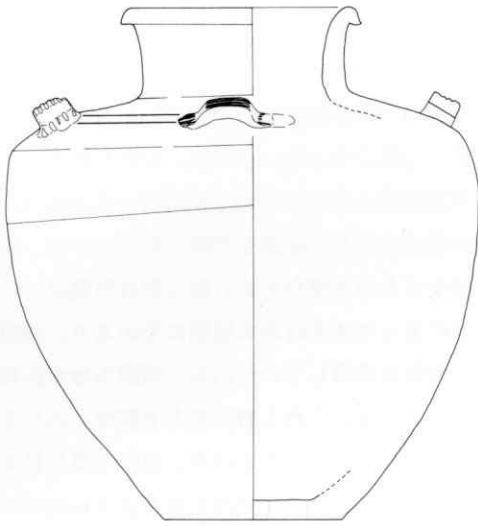
無台の四耳壺で、口縁部に欠損が数カ所と耳を1カ所欠失するほかは保存状態は良好である。なお、底部には穿孔の痕跡がありそれを埋めてある。高台が付けられていた痕跡は見当たらない。法量は器高26.5cm、口径12.7cm、最大胴径25.2cm、底径9.4cmを測る。体部は粘土紐巻き上げ成形され、肩部以下を縦にヘラケズリ調整をしている。頸部は直立し、口縁部は外側へ折曲げられている。肩は強く張り腰部は丸みを帯びて底部へとつながる。肩の上面には四耳を配し、その間をつなぐように二重の沈線が巡っている。耳は4条の刻線をアーチ上面に施した型を用いて成形され、両端の接着部にはヘラ状具で線刻を施している。色調は茶褐色で口縁部内面と肩部上面には自然釉がかかっている。体部には一部に緑黄色の釉が認められるが、施釉されたものかどうかは不明である。胎土はやや砂質気味ながら概ね緻密で、焼成も良好な状態を示している。

（資料2）

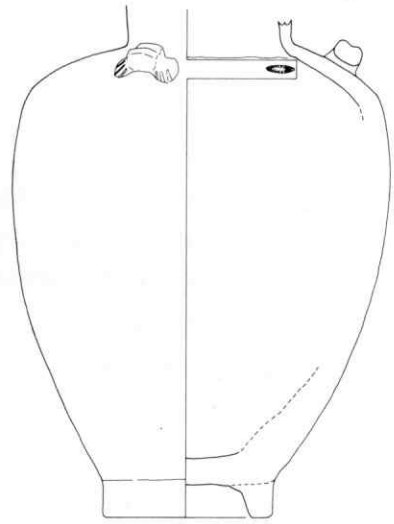
資料は口頸部を欠損するほか、胴上半部に出土時のものと思われる割れ、欠損、接着跡がある。法量は、残存高26.5cm、最大胴径18.5cm、高台径8.3cmを測る。体部は細めの倒卵形で成形は粘土紐巻き上げによっており、底部付近では特に器壁が厚く、底裏には幅広・高めの高台が直立または若干外に広がる形で付く。肩には三カ所等間隔に耳を配しているが、耳は厚い粘土塊の中心を凹ませ、両端は接着後ヘラ状具で線刻を施している。耳のアーチの空間は極めて狭い。各耳間には16弁印花文を一個ずつ捺している。胎土は長石細粒が多く吹き出し、その色調は高台の一部が橙色を呈するほかは茶褐色を示し、堅緻で良好な焼成状態である。肩部上面には自然釉がかかっており、さらに胴部にも全周にわたって部分的に淡黄緑色の灰釉刷毛塗りの痕跡が見られるが、極めて薄く塗っているためか部分的にしか発色していない。

## 3

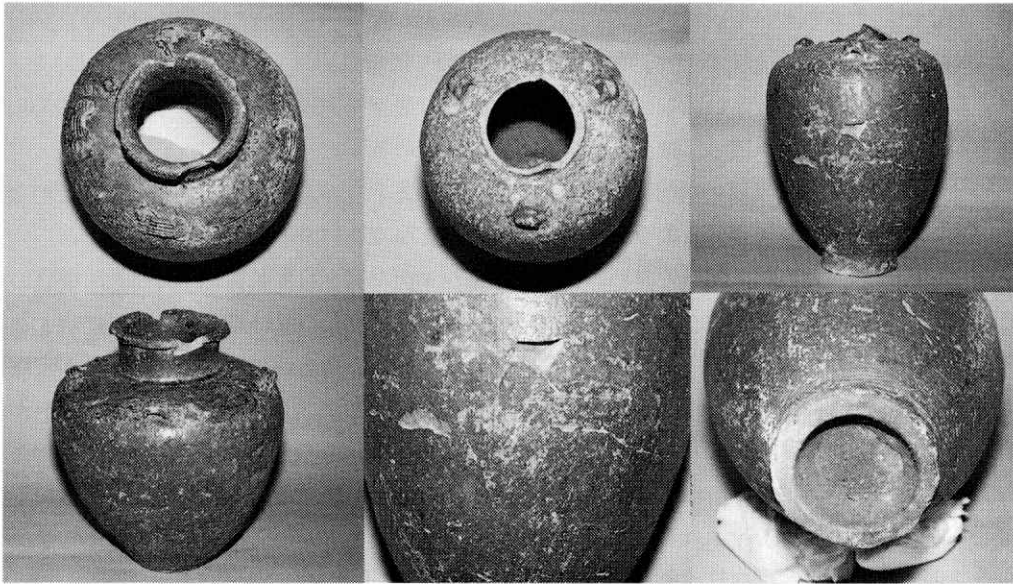
この資料の上に述べたような特長は、一見すると瀬戸窯製品を模した常滑窯製品というように



(資料1)



(資料2) (ともに縮尺 $\frac{1}{4}$ )



(資料1)

(資料2)

見える。それでは常滑窯跡においては、実際にはどのような状況であるか見てみる。

常滑窯跡においては、資料2の耳部と同じように耳の両端に線刻を施す類の有耳壺片が常滑市長曾窯跡、同検原山神水窯跡等で出土している。また、耳の上面を凹状にする例は常滑市鎗場・御林窯等で出土している。紐状のものを2本あわせた結果上面が凹状になった耳部の例は猿投窯や瀬戸窯でも見られるが、当例はそれとは異なる成形法であり、常滑窯特有のものと思われる。これらは破片のため全体の器形を知るに至らないが、広口壺に耳を付けたものが多い。一方、資料1のような型耳は、瀬戸窯では多数確認されるが常滑窯跡では今のところその出土例を知らない。なお、常滑窯跡出土の有耳壺の耳部形態には、この2種類の他に板状の耳を貼り付けただけ

のもの、紐状の細めのものもあり、窯跡以外でも出土地不明であるが紐状のものを2本撚りあわせたものも見出すことができる。

常滑窯跡からは有耳壺は以上のように断片的な資料でしか検出されていない。さらにこれらは無台・無釉のものである。しかし有耳壺とは必ずしも断定できないものの、有台で灰釉をかけた製品も出土例がある。阿久比町上芳池1～3号窯灰原跡から有台壺の下胴部片が3点出土しており、そのうち2点は茶褐色の地肌に淡黄緑色の灰釉刷毛塗りの痕跡を明瞭に残している。高台径は10cm弱で、今回紹介の資料と同程度の大きさになるものと思われる。高台形は外側にハの字に踏んばる形の断面菱形である。この資料は研究者によって比定時期の見解に差があり、13世紀前半から14世紀代まで様々に提示されている。また実物を確認していないが、常滑市檜原山東1号窯跡の窯内からも1点出土していることが報告されている。これも有台壺の下胴部のみであり、断面方形の高台がやや外に開いて付けられ、灰釉がかけられているという。白黒写真で見ると刷毛塗りの痕跡は見られず、高台側面にまで厚くかけられているのか光沢があるように見受けられる。これは他の出土遺物から見て13世紀中葉頃かと見られる。

なお时期的には12世紀中～後葉に遡るが、常滑市亀塚池1号窯跡で短頸壺に灰釉の塗り痕の残るものがある。報告者によるとこれは「焼成前の乾燥段階で生じた亀裂を灰と砂との混合物で補修した」痕跡とされている。常滑窯の短頸壺は通常灰釉が施されるような器種ではなく、釉という意識はないということであろう。他の施釉例については亀裂補修というような現象は確認できず、器種が有台壺に限定され时期的にも下ることから、施釉を前提としたものであり、すでに指摘されているように瀬戸窯の技術との関連を示すものであろう。

以上見てきたような窯跡の状況のほか、胎土・色調や印花文から見てもこの2例は断片的ながら常滑窯跡出土品で確認されるのであり、常滑窯製品と見てよいと思われる。

さて、今回紹介の2例と同類と思われる、全器形を残す稀な例として名古屋市博物館所蔵品の常滑窯の三耳壺がある。高さ39cmの有台三耳壺で、口頸部は直立し口縁は折り返され玉縁状となっている。板状の耳はアーチの空間をあけてしっかりと作られ、両端の接着部にはやはりへら線刻が入れている。肩には耳を挟むように2段に沈線が引かれている。体部は倒卵形で高台が外側に踏んばる形に付されている。器形的には瀬戸窯の灰釉三耳壺の形態に極めて類似している。ただし、肩には自然釉がかかっているものの、人工的な施釉の痕跡は見られない。出土地は不明である。この例は施釉こそされていないものの、上の2資料の本来の形態をこれに見ることができるものと思われる貴重な資料である。

#### 4

常滑窯の有耳壺ははじめに述べたように三筋壺や広口壺に耳を付けたものがいくつか知られてはいた。三筋壺型は常滑市坊田池出土の大型複線有台縦耳のものが初源であろうが、これと同タイプのもは知られていない。その後は三筋文が単線となり口縁部が折り返しまたは狭い縁帯もつタイプのもが多く、时期的に13世紀前半に属するものがほとんどである。また広口壺型は大型で口縁部が折り返しまたはN字状を呈するもので、やはり13世紀代である。両者とも耳は本来の機能を果たさないまでになっているものがほとんどであり、耳を持たないそれぞれの器種の変種と考えた方がよいように思われる。したがって三筋壺、広口壺それぞれの系譜のなかで捉えら

れるべきであろう。

一方、いま取り上げたタイプはまさに瀬戸窯製品を模倣した結果生み出されたものであり、耳の形態や焼成方法等で独自性を示しながらも、今回紹介の2資料の本来の形態が瀬戸窯の有耳壺であったことを物語っている。そしてそれは単に形態のみにとどまらず、灰釉施釉という技術でも一応は模倣可能なレベルにあったことを示すものである。時期的には共伴遺物の年代等からは13世紀前葉から中葉頃が妥当なところかと思われ、それはほぼ同時期の瀬戸窯有耳壺の形態からも想定することができる。しかしながら、これまで見てきたようにこうした製品は極めて稀な例であり、常滑窯においては定着することがなかった。常滑窯においてはむしろ小型で無耳無台のいわゆる玉縁口縁壺の方が量産されている。この玉縁口縁壺は瀬戸窯の有耳壺とともに蔵骨器として使用されている例も数多くあり、機能的には有耳壺と何ら異なるわけではなく、特に常滑窯で有耳壺を生産する必要性は感じられない。しかし、消費地においては瀬戸窯有耳壺を蔵骨器として使用することが優勢であり、そうした消費側の動向も生産側への動機づけとならなかったとはいえない。

ここで、もう一度この2例を見てみると、資料1において底部に穿孔痕があり、資料2において口頸部のみが欠損していることは、他の生産地の四耳壺の多くの出土状況が示す如く、蔵骨器として使用されていた可能性があるものと思われる。これはその本歌というべき瀬戸窯製品のあり方や、出土量の僅少さから見て特注品として製作されたものではないだろうか。常滑窯での有耳壺製作は、このような瀬戸窯製品の性格を踏まえたものであるように思われる。

## 5

今回の例は常滑窯への瀬戸窯の影響を示唆する資料であろうが、短絡的にことさらに大きく取り扱うべき性質の事象ではなかろう。常滑窯生産の一側面として注目するにとどめたい。ただ、両窯では器種分業を行うことによって並存してきたといわれてきたが、今回の例以外にも山茶碗・小皿の生産をともにするほか甕や盤等類似した形態の製品が両者には認められるなど、猿投窯から分化後も散発的ながら接点が見出される。これらは有耳壺とは製作された背景は異なるであろうが、今後こうした点も考慮に入れた研究が望まれる。

### 参考文献

- 中野晴久『亀塚池古窯址群発掘調査報告書』常滑市教育委員会 1993  
青木 修編『長首古窯址発掘調査報告書』同上 1991  
中野晴久ほか『鎗場・御林古窯址群』同上 1985  
『上芳池古窯址群』阿久比町教育委員会 1990  
『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会 1960  
『館藏品図録Ⅰ』名古屋市博物館 1982  
『常滑・渥美』日本陶磁全集8 中央公論社 1977